【実践報告１】

自分達でやり遂げたわくわく会
～一人一人のよさを生かしながら協同して遊ぶ～

別府大学附属幼稚園５歳児担任　　長　尾　有　里・原　田　美　穂

１．はじめに

令和２年度、コロナ禍のような状況であっても、子ども達に豊かな体験をさせたいと強く願い、“できないのではなく、できることを考え、やってみよう”と心が動く遊びや活動、また「どうするといいのか」と試行錯誤するなど遊び込める環境の構成を意識し、学びを深める保育を目指した。(令和２年度センターレポート参照)

令和３年度が始まった当初、今年度探ったり学びを深めたりしたい項目について職員間で話し合い「“座る姿勢を維持できない”“怪我をする子どもが多かった”など体力や筋力の低下は経験不足が関係しているのでは？」「コロナ禍で経験が制限される中でも、昨年度に引き続き子ども達に豊かな経験と体力をつけていくための保育とは？」など課題が明確になっていった。

そこで、つながりを大切にする保育はそのままに、体力をつけることを意識して『遊びでつながる附属っ子～動かそう！楽しもう！挑戦しよう！～』と研究テーマを設定した。

２．研修について

体力向上を目指す保育計画では“「体操をする」「平均台を渡る」など運動を促していく機会を増やして発達を促す”といった考えをしがちになる。しかし、５月下旬に４歳児が展開した段ボール遊びでは「全身で思う存分に関わり遊ぶ楽しさを感じる」という心情面が強く表れたねらいであるが、高く積み上がった段ボールの山に飛び乗る・転がる・落ちないように立つなど体を十分に使う運動の要素が多い。このように本園の経験させたい遊びには心身共に発達を促す視点がある。

そこで「体力を向上させる」という課題をしっかりと意識しながら、これまでのように「遊びを通して主体性を発揮しながら活動を展開できる保育」について研修を続けた。

３．協同性の芽生え

令和３年度の５歳児ふじ・あじさい組40名は、関わり合いを増やすため１つの保育室で生活をしている。

今年度の５歳児はファンタジーなど友達と一緒にイメージの世界で遊ぶことが好きな子どもが多くいた。その姿から絵本『ねこのピート』を題材に一人一人のよさを生かしながら協同して遊ぶことにつながるよう保育を組み立てていった。経験してほしいと考えた遊びや行事、課題などは“ねこのピート”から手紙が届き、その喜びが期待ややる気の心を動かしてきた。また協同して遊ぶようになるために、子ども自ら共通の目当てを生み出すことを願い、手紙には“友達と一緒に”という仕掛けをしている。何かを決める時、壁に当たった時など繰り返し話し合いをする場と時間を作り、担任は根気強く待ち、寄り添い、一緒に考えてきた。そんな５歳児が12月に歌や劇を披露するため、友達と試行錯誤しながら自分達だけの力で劇などに取り組み、やり遂げた姿を報告する。

４．５歳児ふじ・あじさい組の実践「わくわく会をみんなでやり遂げよう！」

＜ねらい＞友達と目当てに向かって相談したり工夫したりして、力を合わせ自分達で遊びを進め、やり遂げていく喜びを感じる

＜これまでの子どもの様子＞

11月に湯布院の山荘四季へＤＡＹキャンプに行った時、森の劇場で見た『おくびょうなうさぎ』の人形劇に興味を示した。幼稚園に帰ると巧技台を使って森の劇場を作り始め、人形劇のストーリーを思い出しながら自分達でなりたい役になって表現を楽しんだ。共通体験をした子ども達にも広げたいと考え、人形劇ごっこを紹介する機会を作ったり更に自分達で話を創ることができるということを知らせたりした。すると、ファンタジーの世界に入って遊ぶことが好きな子ども達は、自分がイメージしたことを口々に出し合っていきアイディアが溢れた。そこで保育者がアイディアを整理し、ペープサートでストーリーを披露すると早速劇遊びが始まった。子ども達が「お家の人にも見てほしい！」と参観日に劇を披露した。その日は、担任が進行役をしながら子ども達が主体的に会を進めていけるよう必要に応じて声を掛けた。山荘で人形劇を披露してくれた順子さんにも見せたいという気持ちになり「わくわく会」と名付けて招待した。ところが順子さんに披露したいという思いをもち準備をしていた所ふざける子どもが多かったため「順子さんは、今ので楽しんでくれるかな？」「絶対しなくてはいけないことではないからやめる？」と問い掛けた。するのかしないのか自分達で考えることができるように担任２人は劇の練習をしているホールから出た。

（1）エピソード１．自分達で進めよう！

＜モニターからみた子ども達＞

子どもの姿	保育者の思い
保育者がホールから出て行った後、①何もせず座っている子ども・数名で集まって何かを話す子ども・うろうろする子ども・保育室へ行ってしまった子どもなどがいた。10分程経つとホールにいた子ども達が保育室に戻った友達に声を掛けに行き、全員がホールに集まった。②徐々に皆で丸になり話し合いをしているのかその後、③劇の衣装を着て、自分の位置へ戻っている。チョコ役は２グループで分かれていて、１番始めに出るはずだったＥ児が泣いていることに気付いた④Ｊ児はＥ児の代わりにチョコ役になり、保育者の言葉を思い出しながらナレーションも行っていた。Ｅ児は、泣き止んだが自分の出番が終わっている。すると⑤ピート役の友達が勇気の印を持って出ていないことに気付き、駆けつけて渡した。子ども達は自分達だけで劇の最後を迎えた。⑥劇遊び後に歌と司会の練習をし始めた。	①保育者の問い掛けを理解していないのかな･･･大丈夫かな。１人は残った方が良かったかな･･･ ②どんな話をしているのかな？ ③保育者を呼びに来ると思っていたのに自分達で始めるの！？ナレーションもいないけど、どうするのかな。 ④友達のことも見ながら取り組んでいる！その場に行って見たいな。 ⑤自分のできることを探しながら参加している。「すごい！」って声を掛けたいけど自分達で取り組んでいる所に行ったら子ども達の学びを妨げてしまう。まだ我慢！ ⑥劇だけじゃなくて司会と歌もするの！？子ども達の集中力がすごい！気持ちが１つになっている！保育者がいない方が力を発揮できることもあるのかもしれない。

劇遊びだけでも驚いたが、司会や歌の練習にも取り組み始めた姿に驚きを隠せなかった。もうしばらく様子を見守ろうと考えたが、モニターでは声が聞こえない。自分達で乗り越えてほしいと願いを込めて担任２人はまだ入らず、他職員と連携を取り様子の撮影を行った。その動画を元に子どもの姿や育ちを追った。

（２）エピソード２．自分達だけで話し合う姿

＜動画で見た子ども達＞

子どもの姿	保育者の思い
司会の練習をしようとした時、A児が「ちょっと待って！順子さん達が来る時は、時間がないよ。司会するん？」と言った。①J児が「はい、Aちゃんの言うことを聞いて下さい。」「はい、座ります座ります。」と、みんながA児に注目するよう大きな声で呼び掛けた。静かになるともう一度②A児が「順子さんが来た時に、司会とかするん？」「時間があったら運動とかするんやろ？それに、順子さんの手紙には司会するとか書いてないよ。」と問い掛けた。すると、J児が「でもさ、時間があったらのためやろ。時間あったらどうするん？」と司会の練習をしていた理由を言った。それを聞いていた③R児が「時間があったら歌とか歌ってもいいんやねん？」と意見を言う。「でも、みんなのお話（劇）が長くなって時間がなくなったらどうするん？」とA児。④「これは、明日の練習でもあるし、幼稚園やめる時の４月の練習でもあるし。」とJ児。それを聞いていた⑤K児が、「じゃあさ、プログラムだけ言えばいいやん。」と、２人の意見を聞いて折り合いをつけようとした。すると、⑥J児が「言いたい人もいるし、言いたくない人もいるし…、じゃあ、言いたい人、手を挙げるー。」「言いたくない人、手を挙げてー。」と、みんなに司会をするかしないかを聞いていった。言いたい人が多く「幼稚園をやめる時の為でもあるし、小学生になる時の練習にもなるし。」とH児。⑦「小学生でも、歌は歌います。司会もします。」とJ児。「それは、みんな分かっているよね。」とA児。「そのための練習だよ。」とH児。自分達が今まで練習してきた司会、自己紹介、歌をしたい気持ちはあるが、時間がなかった時や小学生を意識しての意見の出し合いが続いた。⑧手を挙げずに意見を言おうとしている数名の友	①進めていく役を自らしようとしているな。みんな、J児の話を聞こうとしている！ ②みんなに聞いて確認をしようとしているな。共通理解しようとしているのかな？ ③普段、自分からみんなの前で意見を言うことを恥ずかしがっているのに自分の意見をはっきり言えている。 ④１年生になることに見通しをもって意識しながらするとは･･･！ ⑤何とかよい方法はないかと、友達の意見を取り入れて考えているな。 ⑥ここで話を進めていく役を上手く果たしているな。 ⑦わくわく会の司会の練習の為だけではなく、自分達が１年生になった時にも役に立つことが分かっていて驚くばかり！ ⑧話し合いの仕方が分かっている。私達が話を進めている時は「手を挙げて。」と途中で言う

達に「はい手を挙げて。」と伝え合っている。しかし⑨「でもさ、せんとさ、時間がないよ。」「もう12になるよ。」と、時間が迫っていることに気付いた子どもの言葉に「早くやろうよ。」と言う声が多くなった。すると⑩前に立って話をしていたA児は、自分の席に戻って行った。 それから、「もう10だよ。」と時間を気にしながら、⑪J児が「はい、プログラム、歌。全部終わるまで。」と声を掛け違う子どもが、赤グループに「はい、大丈夫！」とスタートの合図を伝え、司会の練習が始まった。自分達で「はい、もう一回。」と出方をやり直したり司会の位置を教え合ったりしながら進めていった。⑫M児は、「私の名前は○○○○です。」とはっきり話している。自己紹介できたことに対して、「Mちゃん、今の良かったよ。」とH児が声を掛け「今のＯＫ！」と、互いに頑張っている姿を認め合っていた。	ことがまだ多いのに自分達でできている。 ⑨今のこの話し合いの状況を判断し、進めようとする声！時間の見通しがもてているな。 ⑩いつも自分の意見を強く出そうとするA児が、一歩引いて戻った。でも、あの場面で自分から意見を言おうとみんなの前に出て行った勇気は認めてあげたいな。 ⑪自分達で練習の必要性を感じているからこその姿だな。こういう時に進めていける役はJ児かな。 ⑫担任が声を掛けても言おうとしないM児がみんなの前で声を出している！それをその場で認めてあげている！友達が頑張っていることも分かっているな。

わくわく会の練習が終わると、担任を呼ぶことなく自分達で給食の準備をした。主体的に行動していくたくましさに関心しながら“自分達の出番”を丁寧に考えた。その後の子ども達との再会で見た輝いた表情や自信をもった姿に感動した。

昨日の姿を見て子ども達ならできるのではないかと考え当日を迎えた。

（3）エピソード３．できるよ！僕達・私達だけで！

わくわく会当日「もうすぐ順子さんが来るよ。」と知らせると「もう、衣装着てもいい？」というＳ児の言葉を聞いてＫ児が「僕も！」と衣装を着始めた。その姿が周りにも伝播していき、担任の指示がなくてもそれぞれが考え“今は準備する時”と必要性を感じながら取り組んでいった。みんなが劇の衣装を着終えた頃、担任が「昨日“自分達でできる、頑張る”って言っていたけれど、どう？」と問い掛けた。すると「うん、できるよ。」と満面の笑みで答えた。「じゃあ、先生達は何をすればいい？」と再び問い掛けると「何もしなくてもいいよ！」と口々に答え「えっ？ナレーターも？ピアノも？」と尋ねると「うん。大丈夫！全部できる！」と自信満々の表情であった。「じゃあお任せするね。でも、困ったときはいつでも助けられるようにお客さんの所で見ておくからね。」と安心できるよう声を掛け、ホールへ向かった。昨日見守っていた主任が、担任がいないところでもう一度子ども達に「大丈夫だね、できるね。」と声を掛けており、更に意欲を高めてわくわく会に取り組んだ。順子さんとの再会を喜びながら、少し緊張した

表情で劇が始まり、途中で話が止まると「そこへ、カエルがやって来ました。」とＪ児がナレーターをしたり出番を忘れている友達に、「次はベルニャンだよ。」「立って！」と互いに声を掛け合ったりして劇を進めた。次に披露した自己紹介や司会でも頑張っている友達に「いいよ。今のＯＫ！」と前日同様その場で認める言葉を掛け、最後の歌や行進ではピアノの音がない状態でも自分達で「チャ、チャーン、チャーン。」と声で音をつくって進めていった。

終わりになると、運動をするのかしないのか気になった様子が見られたので「みんなが練習をしたことはここまででいいかな？」と担任が声を掛けると「そう。これで終わり。」と答えた。みんなが終わりを把握し、順子さんから「楽しかった。」と感想を言ってもらうと「今度はさんちゃんにもう一度見せたい。」との声も聞こえた。“まだまだやりたい、見せたい、自分達は出来る”という気持ちを隠せない様子であった。保育室に戻り、担任が「先生がいなくても自分達でしていて、とってもすごかったよ。」「順子さん達も楽しそうだったね。」と声を掛けると、準備、片付け、劇、司会と全てやりきったことに充実した笑顔が見られた。

５．考察

協同して遊ぶには、以下のことが重要であると考える。

○遊びそのものが魅力的であること

・ファンタジーの世界に興味を強くもっている子ども達という特徴を捉え、絵本『ねこのピート』の手紙や山荘で見た『おくびょうなうさぎ』の人形劇など心を動かす題材を選び、タイミングを探って取り入れたことで次々と遊びが発展していった。

○困った、うまくいかないなどの状況

・劇遊びでは自分達は楽しんでいたが担任からは「しなくてもいいよ。やめよう。」という言葉が告げられ、さらにその場からいなくなったという状況において、子ども達はこれまでとは違った思いがめぐったのだろう。そこから進めることが得意な子ども達が中心となって“どうするとよいか”と考えを出し合い、“自分達でやっていこう“という共通の目当てを見い出した。練習が進むにつれ、できないことを責め合うのではなく、アドバイスや励ましの言葉が飛び交い、それぞれが友達に助けられた、認められたという喜びを感じる時間にもなるなど目当てに向かって協力するという学びにつながった。

○話し合いの積み重ねと援助

・キャンプや運動会、動物園ごっこなど困りがでると繰り返し話し合いの場を作った。１学期は思いを出す子ども中心で話が進んでいたが、保育者が少人数の意見や思いを表現しにくい子どもに目を向けながら、話し合うことを大切にしたことで聞く力や聞き入る力が育ち、自分達で答えを出すようになった。

・子ども達に話し合う機会を作ることを大切にしながら、劇のストーリー創りのように意見が溢れたり考えがまとまらずに留まったりした時に、保育者が話を整理し「分かった。」「話し合ってよかった。」という気持ちをもたせていった。また、行き詰った時は保育者がアイディアを提供し、一緒に考える姿勢を続けたことで信頼し合う関係へとつながっていった。

○互いのよさを分かっている友達の存在

・Ａ児のような“私の考えを聞いてほしい”と強く思っている友達に対してすぐに否定するのではなく「言うことを聞いてください。」と皆に注目させたＪ児やＡ児の考えに対して自分の意見を伝えるＨ児やＲ児、更に意見の食い違いに対して折り合いをつけたＫ児などの姿から、互いに得意

なことや苦手なことが分かっていて、認め合うことができる関係性を築いている。いざこざや思うようにいかないことへの葛藤を友達と一緒に乗り越え、その積み重ねによって信頼できる仲間になっていくのだろうと思った。また、A児も聞いてくれる友達とのやり取りを繰り返すことで、自分の思いを出すこととともに相手にも考えがあると理解する学びにつながっていくだろう。

６．まとめ

１月18日、地域の方が幼稚園のサッカーボールを届けてくれた。これでご迷惑をおかけしたのは６回目である。快く対応してくださったことに感謝しながら、５歳児のボールゲームをしている子ども達に対して「またか～。」という感情が湧いた。

こんな時は「禁止」という方法がよぎるが、「ボール遊びがしたいならどうするべきか？」「ボールが出ないようにする方法を考えることが大切では？」と話し合う場を作った。事例のように何かあった時は話し合うと解決できると学んできた５歳児は「話し合いはグループがいい。」と話し合いの条件（人数）にも気付いている。そして皆で考えた方法は①風の吹く方向を考えてゴールを変える　②正門に見張りを二人つける　③正門から出ないように段ボールで壁を作って遊ぶの３点である。さらに翌日、保育室では段ボールの壁を作り、サッカーやドッチボールなどをしない子どもも進んで取り組んだ。その日から今日までボールが出たという報告はない。

“ボールを園外に出さないためには”という共通の目当てをもち、友達と試行錯誤して実現に向かっている姿こそが協同性の芽生えだと感じた。

～段ボールの壁を一緒に作ろう！～

～完成！皆で運ぼう！～

～どうやって設置する？～

～そこを持って！ゆっくり巻くよ！～

私達は、主体的に行動する子ども像を描きながら、個々のペースを大切にするとともに、協同性を促す援助に力を注いできた。残りの２か月、子ども達の力を信じていき共に力を合わせて生活したり学び合ったりできるようにしていきたい。

次年度も継続して、保育の質を高める保育の在り方を探り、更に本園の教育課程改訂に取り組みたい。